

文化庁委託事業

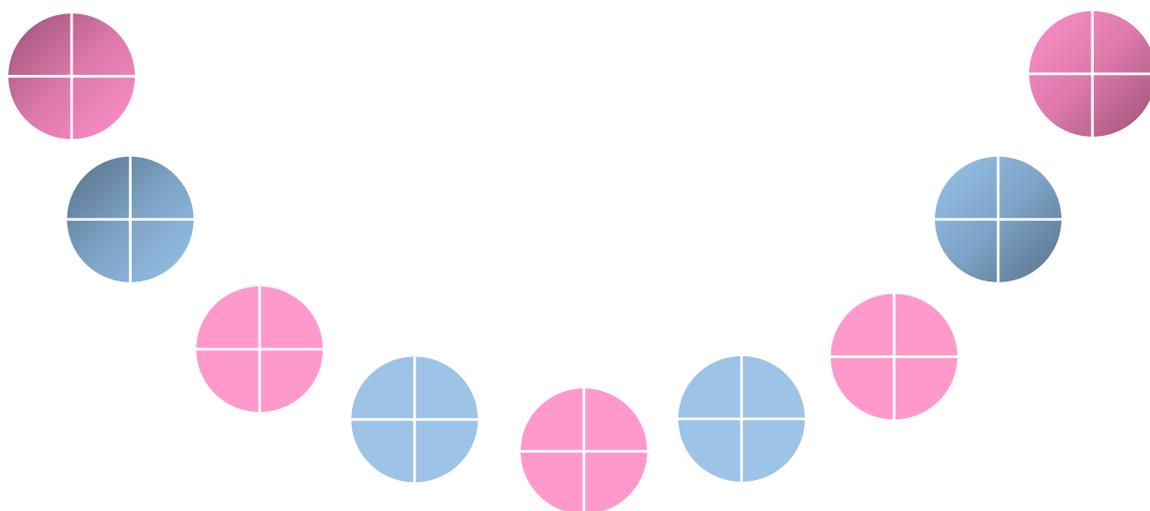
令和2年度

劇場・音楽堂等基盤整備事業

地域別アートマネジメント・

舞台技術研修会

実施報告書



公益社団法人全国公立文化施設協会

●**アートマネジメント研修会**

関東甲信越静地域 研修会	・・・・・・・・・・・・・・・・	2
東海北陸地域 研修会	・・・・・・・・・・・・・・・・	7
近畿地域 研修会※	・・・・・・・・・・・・・・・・	11
中四国地域 研修会	・・・・・・・・・・・・・・・・	15

●**舞台技術研修会**

関東甲信越静地域 研修会	・・・・・・・・・・・・・・・・	21
中四国地域 研修会	・・・・・・・・・・・・・・・・	26
東海北陸地域 研修会	・・・・・・・・・・・・・・・・	30

※近畿地域：アートマネジメント研修会・舞台技術研修会 合同開催

地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会（関東甲信越静地域）

実施要項	
事業名	令和2年度文化庁委託事業地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会（関東甲信越静地域）
趣旨	「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」及び同指針に基づき、研修プログラムを作成し、劇場・音楽堂等の企画力、創造力、運営能力、技術の強化や、職員の自発的な研鑽と自己啓発を促すため、若手職員等を対象とした研修会を行う。また、地域職員の交流を深め、相互のネットワーク形成及び情報交換の場とすることを目的とする。
開催期間	令和2年11月27日（金）
会場	YCC県民文化ホール（山梨県立県民文化ホール） 所在地 〒400-0033 山梨県甲府市寿町 26-1 電話 055-228-9131
問合せ先 （事務局担当施設）	YCC県民文化ホール 電話 055-228-9131
参加人数	158名（参加施設 88施設）

研修日程・内容			
	日時	内容	講師等
11/27 （金）	13:00～13:30	受付	
	13:30～13:40	開講式	
	13:40～14:50	講義1 『新型コロナの猛威 第3波の襲来-正しい知識と対処法-』 質疑応答	国立大学法人山梨大学 学長 島田 眞路 氏
	14:50～15:05	休憩	
	15:05～16:15	講義2 『東フィルコンサートから学ぶ感染症対策-東京フィルの体験談から今後の劇場のあり方を考えます-』 質疑応答	(公財)東京フィルハーモニー交響楽団 楽団長 石丸 恭一 氏
	16:15～	閉講式	

研修会記録

1 はじめに

令和2年度は、新型コロナウイルスの世界的な蔓延により、劇場・音楽堂等はこれまでの常識を大きく変えざるえない事態になっている。人類にとって経験のない事態であり、日々情報が変わる中で、劇場・音楽堂等の職員は、新しい様式への対応が求められている。

当研修会では、いまだ正確な対処法が確立されていない中ではあるが、当感染症について現状までの最新情報を学び、これからの劇場・音楽堂等のより適切な管理運営について探った。

講義1では、感染症が一般に知れ渡る前から警鐘を鳴らし、感染症対策に努めてきた国立大学法人山梨大学学長 島田眞路先生から医療現場の最新情報を解説してもらった。

講義2では、政府からの自粛要請緩和後、いち早く感染症の予防対策を講じながら演奏会を開催し成功させた交響楽団（公財）東京フィルハーモニー交響楽団の楽団長 石丸恭一先生から当時の経験談や現在の対策について講義をいただいた。

なお、今回の研修会では、感染症拡大予防の観点から zoom を活用したオンラインでも配信を行った。

2 研修内容

講義1『新型コロナの猛威 第3波の襲来-正しい知識と対処法-』

講師 島田 眞路 氏（国立大学法人山梨大学 学長）

1. 新型コロナウイルスについておさらい

SARS：2002年11月に発生、2003年7月に終息（2004年に散発的発生あり）

感染者 8096人 死者 774人 肺炎症状を主徴とし発熱や呼吸困難を呈する

MERS：2012年9月に発生 現在も発生中

感染者 2494人 死者 858人 肺炎症状を主徴とし発熱や呼吸困難を呈する

新型コロナウイルス感染症：2019年12月に発生？

現在も世界的パンデミックの状態

感染者 57万人 死者 137万（11月23日現在）

呼吸器症状、嗅覚・味覚異常が生ずる症例がある他、無症状性も多いとされる

SARSの二世のようなもので、アメリカ、ヨーロッパが中心で世界中に感染が渡っている大変な感染症

日本の新型コロナウイルスの感染者数及び死亡者数は、世界と比べると非常に少ない。しかし、現在、国内では日々増加しており、感染者 13万人、死亡者 1900人（11月24日）と第3波の真っただ中にあるといえる。第1波の日本においては感染者



講義1 島田眞路氏

数が少なく見えるが、実際は PCR 検査が非常に少なく感染者が少なく見えてしまっている。
東京都、大阪府、北海道、沖縄の感染まん延状況を見ると、病床の確保数に余裕があるように思うが、医療従事者の数や設備不足など体制が整っておらずひっ迫している状態である。

2. ジャパンミラクル（日本の奇跡）の虚構

もともとアジアの国々は、世界と比べ感染者が少ない。日本とアジアの感染者数・死者数を比較すると日本はアジアの中では多い。日本の PCR 検査数は最も低く、いまだ検査数が伸びていない状況である。

日本は死者が少ないからいいのではないかという声があるが、欧米と比べて死者数が少ないのは西太平洋に共通した特徴であり、地域内でみると日本は決して少なくない。

データからもわかるように感染対策をしっかりやっている国は、死亡者があまり出でおらず、アジア各国の数は落ち着いてきているが、日本とフィリピンだけは、平坦化せず死亡者数が増加している。

『ジャパンミラクル』ではなく、『アジア・太平洋ミラクル』といえる。日本は 10 万人当たりの死亡者数が非常に多くアジアの中では劣等生である。

3. 今後に向けて

感染は、人の動きを止めないと止まらない。日本は、『Go to』のように経済政策をとっており、感染抑止策は行っていないことが心配である。感染者が増えると重症者も増えていく。PCR 検査をどんどんやって、陽性者と陰性を分けていくことが大切である。

新型コロナウイルスの特徴はいまだわからないが、ただのかぜと舐めるとしっぺ返しをくらうことになる。

講義 2 『東フィルコンサートから学ぶ感染症対策-東京フィルの体験談から今後の劇場のあり方を考えます-』

講 師 石丸 恭一 氏（公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団 楽団長）

今回の講演依頼を受けたのが 8 月であった。その頃は、11 月にもなるとコロナも解決しているのではないかと思っていたが、第 3 波がきていまだ渦中である。来月には第九演奏会も計画されており、どのように実施するのか話し合っているところである。

我々には、早くから欧州の情報が入っていた。特にドイツ。3 月には、ソーシャルディスタンス、マスクなど芸術や劇場についての情報がでてきた。ドイツでは、医学、科学、芸術など分野を超えたコミュニケーションがあり研究がなされていた。日本では、そのころからやっと取り組み始めた。



講義 2 石丸恭一 氏

イベントの自粛要請により多くの公演が中止となり、日本の文化の運営・経営のやり方に影響を及ぼしてきた。

4月、欧州では、どうやって再開を進めるかということが検討されはじめ、ドイツのオーケストラ連盟では、管楽器の飛沫実験・実証が行われ発表された。

欧州では、日ごろから分野を越えたコミュニケーションやリスペクトがあり、今回のコロナについても分野を超えて対応が早かった。今こうして反省するのは、日本も他分野とのコミュニケーションやリスペクトを持ち、SARSの経験もあったのだから、より早い対策を講じるべきであったと思っている。

【東フィルの方針】

新型コロナウイルスは、人類全体に関係する一大事である。そこで当楽団では、感染症の対処方針として、人類を3つのカテゴリー（A:世界全体の人々、B:音楽を楽しむ人々、C:アーティスト）に分け、Aを基準にB、Cが折り合っていくこととし、「接触を避ける」ことを行っている。

○お客様対策

- ・お客様とアーティストを物理的に分ける（定期演奏会の開催状の送付）
- ・舞台裏、屋外などステージ以外の場所でも対策を行う
- ・チケット、もぎりなど接触が避けられない部分については、『はがきチケット』を送付し対策。はがきチケットでは、来場者の緊急連絡先の記入のお願い、もぎりずに拝見のみで入場、帰りは回収ボックスへ投函していただきお客様との接触を無くした。

○アーティスト対策

- ・今、多くの劇場や楽団が行っている対策。皆さんがやっていることは当初よりやっていた。

反省点は、日本も欧州と同様にもっと早くから研究をやっていなければいけなかったことだと思っている。そのためには、他業種とのコミュニケーション、リスペクトが必要であった。SARSの経験を活かすこともできず、欧州の各国と比較すると日本の対応は遅かったと感じている。

○質疑応答

① オーケストラ練習時の具体的な対策を教えてください。

楽器ごとにどのように拡散するか、個人ではどうか、グループではどうかを検証し、ソーシャルディスタンスに反映させている。飛沫は、楽器によって異なるが、口元から横に広がる方が多い。防御板（アクリル板）を横に置いている。

② ソーシャルディスタンスによって、演奏する上で問題点はありますか？

多少の慣れでクリアできる。演劇などはもっと大変なのではないか。

当楽団では、当初から高齢の楽員、基礎疾患のある楽員、体調が悪い楽員は参加させず、万が一に備え、待機メンバーを用意して行っている。

③ 資料写真より、アクリル板がある楽器とない楽器がありますが、これで良いのですか？

楽器によって飛沫の範囲に違いがある。楽器ごとにスペースを確保している。

多くの人が、唄口から飛んでくると思っているがそうではない。唄口の小さい楽器は、口から洩れる息が大きい。

④ はがきチケットの回収を行っているとのことだが回収率はどのくらいか？

100%である。

⑤ 貴楽団の第九演奏会の合唱について対策はどのように考えていますか？

7月から様々な検証を行ってきた。コーラスだけは困難と結論づけた。合唱団の前後左右とも距離をしっかりと、何名を舞台にのせることができるか、どの曲ができるのか、PAを使った公演も検討中である。現在は、生声、PA 両方に対応できるように準備している。

3 研修を終えて

① 事業評価

新型コロナウイルスの正しい知識やコロナ禍を経験したオーケストラ運営について学ぶことができた点はよかったが、アンケート結果を見ると、劇場・音楽堂等の具体的な感染症対策や対策事例について話が少なく、やや不満という意見も多くあった。

オンライン配信を行った点については、遠方からも参加できたと非常に高い評価を頂いた。

② 当研修会の意義

多くの人が気にしているテーマであったため、劇場・音楽堂関係者だけではなく、アマチュア芸術団体や市民など幅広い分野から参加があった。貴重な話をきく機会になった。

③ 今後の課題について

初めて数百人規模のオンライン配信であったため、運用の混乱を避け、質疑応答は会場とオンラインを通じた質問に限定した。しかし、それを知らなかった参加者からチャットによる質問が寄せられており対応できなかった。実際、スムーズに進んだことからチャットを活用した質疑応答も受けつけた方が良いと思う。

劇場・音楽堂等が、このような研修会を通して日本の文化芸術の振興に努めていることを多くの市民に知っていただくことは必要なことと思うが、毎回、当研修会は市民への告知をほとんど行っておらず参加はまばらである。市民参加をどのくらい奨励するのか方向性を明確にし、それに伴い PR 費の確保も必要ではないかと思う。

地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会（東海北陸地域）

実施要項	
事業名	令和2年度文化庁委託事業地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会（東海北陸地域）
趣旨	劇場・音楽堂等の職員を対象として、施設の管理運営を行う上で直面している課題について専門的な研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
開催期間	令和2年10月9日（金）
会場	岐阜市文化センター 所在地 〒500-8842 岐阜県岐阜市金町 5-7-2 電話 058-262-6200
問合せ先 （事務局担当施設）	不二羽島文化センター 電話 058-393-2231
参加人数	79名（参加施設 41施設）

研修日程・内容			
日時	内容	講師等	
10/9 （金）	10:00～10:10	開講式	
	10:10～10:50	講演Ⅰ 『コロナ禍での会館運営を振り返って』	（公社）全国公立文化施設協会 専務理事兼事務局長 松本 辰明
	10:50～11:00	休憩	
	11:00～11:40	講演Ⅱ 『アートの現場から見る今後の館のセルフプロデュース方法』	（一社）アート東京 代表理事 来住 尚彦 氏
	11:40～11:50	休憩	
	11:50～12:30	講演Ⅲ 『これからの5年で起こる変化と2025年問題を見据えた会館運営』	岐阜新聞社 読者局長 細野 健一郎 氏
	12:30～13:30	休憩	
	13:30～15:20	講演Ⅳ ディスカッション 『コロナ禍から新しい生活様式での会館運営と今後』	松本 辰明 来住 尚彦 氏 細野 健一郎 氏
15:20～15:30	閉講式		

研修会記録

1 はじめに

劇場・音楽堂等の活性化、地域の文化芸術の振興等を目的としたアートマネジメントや劇場・音楽堂等の舞台技術を統括管理するために必要な専門的知識・技術の取得に関する研修会を実施し、専門性の向上と劇場・音楽堂等の活性化を図る。

アートマネジメント研修会については、各地域において、劇場・音楽堂等の優れた自主事業等を企画する能力、管理運営能力の養成を図るため、劇場・音楽堂等の職員等を対象とした研修会を実施する。

2 研修内容

講演1 『コロナ禍での会館運営を振り返って』

講師 松本 辰明（公益社団法人全国公立文化施設協会 専務理事兼事務局長）

全公文が国の方針を基に作成・発表した「劇場、音楽堂等における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」を踏まえて、コロナ禍の中、文化施設が果たす社会的役割について伺った。



講演2 『アートの現場から見る今後の館のセルフプロデュース方法』

講師 來住 尚彦氏（一般社団法人アート東京 代表理事）

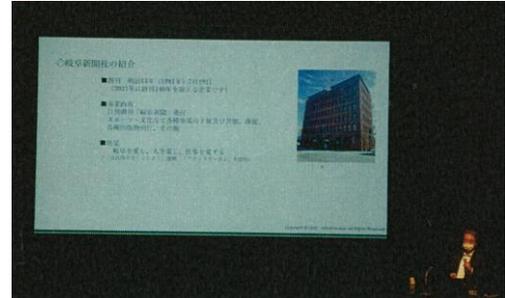
コロナ禍の中、新しい生活が提唱されていることを踏まえ、文化施設の事業は今後どのように展開するべきか、事例紹介を通じて、地域に求められる文化施設の役割や在り方を探った。



講演3『これからの5年で起こる変化と2025年問題を見据えた会館運営』

講師 細野 健一郎 氏（岐阜新聞社 読者局長）

団塊の世代が後期高齢者となり、超高齢社会と予測される2025年以降を見据えた文化施設の運営について、地元の状況を踏まえて、社会的な側面から解説して頂いた。



講演4 ディスカッション『コロナ禍から新しい生活様式での会館運営と今後』

講師 松本 辰明 来住 尚彦 氏 細野 健一郎 氏

先の各講演を踏まえ、コロナ禍の中で、地域に求められる文化施設の役割や在り方について、参加者からのアンケートの質問にお答え頂きながら、自由闊達に意見を述べていただき、本テーマについての問題意識の共有や理解深化を図った。



3 研修を終えて

① 事業評価

コロナ禍における会館運営というタイムリーな内容を軸にプログラムを構成したことで、今まさに会館職員が直面している課題にどう向き合うのか、地域に求められる施設の本来の役割を考え直す機会となった。参加者からは「具体的なコロナ対策が聞いてよかった」「コロナに対しできる限りの予防対策と地域住民とのつながりづくりをやっていく」といった前向きな意見が寄せられ、支部研修会にも高い評価が寄せられた。

② 当研修会の意義

コロナ禍という先の見えない未曾有の事態に対し、悩みや課題を共有することで実施すべき方策が見え、前向きに取り組んでいこうとする活力が生まれると考える。自館や自治体だけの考えではなく、幅広い異なった視点で物事を捉えなおし、今できること、今やるべきことを見出していく。

③ 今後の課題について

それぞれの講師の立場によって説明内容等に差が生じたため、関連する内容は講義内容の共有を行うことが望ましい。また、自治体等の方針により研修会への参加自体が難しいというような場合も考えられるため、遠方の参加者はオンラインで参加できるようにするなど、より多くの参加者が参加しやすい方策を検討する必要がある。

地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント・舞台技術研修会（近畿地域）

実施要項	
事業名	令和2年度文化庁委託事業 地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント&舞台技術合同研修会（近畿地域）
趣旨	近畿地域の公立文化施設の職員等を対象として、アートマネジメント能力と技術能力の向上に関する専門的な研修を行い、地域の文化芸術の振興と公立文化施設の活性化に資することを目的とする。
開催期間	令和3年2月18日（木）
会場	吹田市文化会館 メイシアター 小ホール 所在地 〒564-0041 吹田市泉町2丁目29-1 電話 06-6380-2221
問合せ先 （事務局担当施設）	吹田市文化会館(メイシアター) 電話 06-6380-2221
参加人数	34名（参加施設 20施設）

研修日程・内容			
日時	内容	講師等	
2/18 （木）	13:00～13:30	受付	
	13:30～13:40	開会	
	13:40～15:00	講義1 『ICT活用によるホール事業の飛躍に向けて～オンラインで見直される舞台芸術とホールのあり方～』	くらしに音楽プロジェクト事務局 局長 砂田 和道 氏
	15:00～15:10	休憩	
	15:10～16:40	講義2 『コロナ禍によるライブ配信の可能性』 質疑応答	(株)TRIAL CORPORATE 代表取締役 上田 茂 氏 アシスタント：(公社)全国公立文化施設協会近畿支部 アドバイザー 山形 裕久 氏
	16:40～16:45	閉会	

研修会記録

1 はじめに

全国的にコロナ感染者が増加し、他の地域別研修会が中止となる中で、近畿地域は通常通り研修会を開催するのか、否かというところから検討を行いました。

協議の結果、実行委員の強い思いにより開催という運びとなりましたが、従来のように2日間ではなく1日に縮小し、研修内容には配信を取り入れ、新しい生活様式を踏まえた内容とし、希望者にはZoomを用いて配信を行うこととしました。また、状況によっては配信のみで研修会を開催することも視野に入れ実施いたしました。

2 研修内容

講義1『ICT活用によるホール事業の飛躍に向けて～オンラインで見直される舞台芸術とホールのあり方～』

講師 砂田 和道 氏（くらしに音楽プロジェクト 事務局長）

●オンライン配信の事例

コロナ禍で、アメリカのボストン交響楽団は楽団主体で過去の映像をYouTubeにあげてファンとの繋がりを作ろうとした。

当初は、楽団員主導で動画をあげていたが、次第にマネジメント側よりどのような動画をあげてほしいかの方向性を示した（楽器の練習法やメッセージ動画など）。

日本のオーケストラも配信は行っていたが演奏だけのものが多い。アメリカとの違いは動画にメッセージ性（コロナ禍でも一緒にがんばろうなど）があるか否かである。

●オンライン配信によるワークショップの試行

- ・文化庁の補助金を申請し、無観客でのライブ配信（アメリカ、イギリス、韓国などからも視聴）を実施した。
- ・リアルタイムでアンケートを実施した。配信をリアルタイムで見た人と、オンデマンド配信で見た人で回答傾向がどのように違うのかについて外部評価をした。

●課題

- ・照明（舞台の前のほうに来ると照明が当たらず顔が暗くなる）
- ・ライブ配信サービスはどこにすべきか（リアルタイムアンケートとの相性はどうなのか）
- ・利用者とホール（貸館担当、舞台技術）、スタッフとの間での用語の定義を決めておくべき

●オンライン配信の第一歩

オンライン配信の設備を充足させてホールの付加価値を高めることで利用客、利用料金収

入を増やす。

公演制作に多様性、独創性を持たせてホールの魅力を向上させる。

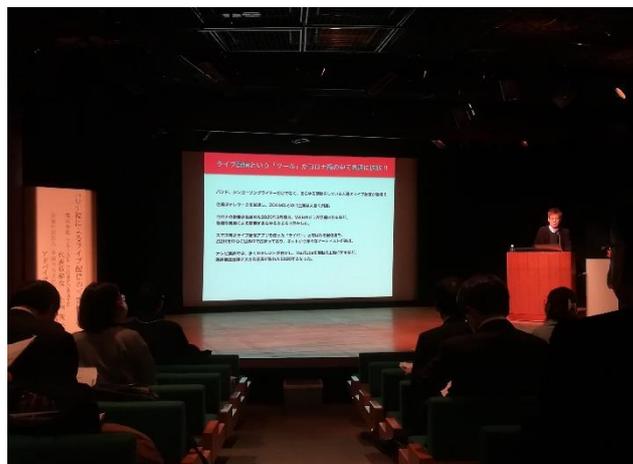
● 今後に向けて

ミッション、ビジョン、戦略、手法選択、計画、事業の集中を考えたうえで、適正なプログラム、適正なアーティストを整えていくことが組織やサービスの価値を高めていく。

これを念頭に置き組織がコミュニケーション活動を通じ社会から信頼を得て、組織活動全体としてマーケティングを設計し、コミュニケーションを設計していくことが重要である。



講義 1



講義 2

講義 2 『コロナ禍によるライブ配信の可能性』

講師 上田 茂 氏（株式会社 TRIAL CORPORATE 代表取締役）

アシスタント 山形 裕久 氏（公益社団法人全国公立文化施設協会近畿支部アドバイザー）

● コロナ禍による影響

- ・コロナ禍により、多くの公演がキャンセルとなり、スカイプや Zoom を使ったライブ配信が急速に拡散していった。企業はテレワークを推進し、Zoom などの IT 企業は大きく飛躍した。
- ・スマホ向けのライブ配信アプリを使った「ライバー」と呼ばれる配信者が広まった。芸人やアーティストが YouTube に活動の拠点を移していった。

● コロナがエンタメ業界にもたらした2つのこと

1)配信が新たなビジネスモデルとして確立されつつあること

コロナ禍で公演開催が制限される中、有名アーティストが有料ライブ配信を実施した。無観客でのライブ配信は 2020 年から始まったのではないか。

- 例・サザンオールスターズライブ チケット購入者は18万人越
裏方スタッフ（400名）の雇用を守るということについても取り組まれた。
- ・海外ではゲーム内でVRやARの演出を含めたイベント

2) 業界の構造改革が余儀なくされたこと

勤務時間や作業負荷の軽減、業務内容の効率化、チケット販売形態の変化など業界としては、生き残りをかけて変革が求められている時期である。

メジャーに限らず、インディーズシーンで活動するアーティスト（シンガーソングライター、バンド、アイドルグループなど）もライブ配信を始める。

新しい収益の取り方を模索←Zoom 飲み会+ライブ配信、デジタル物販など

●新しい収益構造

- ・小規模ライブハウスでは、「ツイキャス」を使ったライブ配信が一般化。投げ銭やプレミアム配信で収益を得ることにより新たな収益構造が生まれたが、ライブハウスを運営する事業者にとっては、従業員の雇用、店舗家賃などの問題がある。→政府主導の助成金・協力は、根本的な解決にはなっていない。
- ・「With コロナ」は、エンタテインメント業界だけでなくあらゆる業態にとって大きな転換点を迎えている。コロナ禍が落ち着いても従来通りに戻ることはあり得ない。今後、変化に適応した対応が求められることとなるだろう。

●質疑応答

- ・ライブハウスから配信するには経費はどのくらいかかるのか。
 - ・定点カメラの配信では飽きてしまうのでどのように工夫したらよいのか。
- その他、参加者からの多くの質問に回答いただいた。

3 研修を終えて

会場では、一連のコロナ対策は講じていましたが、はたして、緊急事態宣言が出ている状況での研修会に受講者が集まるのだろうか、と不安を持ちながらの開催でしたが、思っていた以上の参加人数となりました。会場には足は運べないけど、配信ならと、Zoomでの参加を希望された方もいらっしゃいました。

講義1では、以前から「配信についての意義、可能性」について強い意識をお持ちの「くらしに音楽プロジェクト」の砂田和道氏に、映像を取り入れながら配信の事例についてお話いただきました。講義2では、無観客ライブ配信を数多く手掛けられた上田茂氏が、会場とライブハウス「東梅田 AZYTATE (アジタイト)」を中継で結び、質疑応答等、実践的な内容の講義となりました。

配信は、近畿地域の研修会では、初めての試みで事務局としては戸惑うこともありましたが、今後の会館運営において、配信が増えていくのは避けられないことと思っています。

地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会（中四国地域）

実施要項	
事業名	令和2年度文化庁委託事業地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会（中四国地域）
趣旨	劇場・音楽堂等の職員を対象として、アートマネジメントに関する専門的な研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
開催期間	令和2年12月10日（木）～12月11日（金）
会場	鳥取県立県民文化会館（とりぎん文化会館） 第1会議室 所在地 〒680-0017 鳥取県鳥取市尚徳町 101-5 電話 0857-21-8700
問合せ先 (事務局担当施設)	とりぎん文化会館 電話 0857-21-8707
参加人数	63名（参加施設 24施設）

研修日程・内容			
	日時	内容	講師
12/10 (木)	13:30～14:00	受付	
	14:00～14:10	開講式	
	14:10～15:10	講義Ⅰ 『コロナ禍における今後の公立劇場マネジメント』	慶應義塾大学 名誉教授 美山 良夫 氏
	15:10～15:20	休憩	
	15:20～16:20	講義Ⅱ（前半） 『地域劇場の役割～三重県文化会館の取り組み事例から～』	(公財)三重県文化振興財団 三重県文化会館 副館長兼事業課長 松浦 茂之 氏
	16:20～16:30	休憩	
	16:30～17:30	講義Ⅱ（後半） 『地域劇場の役割～三重県文化会館の取り組み事例から～』	
12/11 (金)	9:00～9:30	受付	
	9:30～10:00	(移動)	
	10:15～11:30	事例紹介・施設見学 『地域創造発信型アートマネジメント「鳥取からの発信～地域劇場の現場から～』	(特非)鳥の劇場 芸術監督 中島 諒人 氏
	11:45～12:15	移動、解散	

研修会記録

1 はじめに

中四国地域アートマネジメント研修会は、文化庁の委託を受け、劇場・音楽堂等の職員を対象として、アートマネジメントに関する専門的な研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化を目的とし開催した。

コロナ禍での開催となったが、この現状であるからこそ“文化芸術”の必要性を今一度見つけなおす機会と捉え、具体的にどのような活動が可能なのか、事例紹介を含め、その手法を学ぶことを目的とした。

2 研修内容

講義Ⅰ『コロナ禍における今後の公立劇場マネジメント』

講師 美山 良夫 氏（慶應義塾大学 名誉教授）

- ・スペイン風邪流行時と比較したコロナ禍における現状について
- ・コロナ禍の影響について
 - 【ステージA】感染リスク回避、移動制限等
 - 【ステージB】経済問題（出演者、主催者、施設、関連業界等）
 - 【ステージC】業態の（有無を言わさぬ）変更 ⇒ テイクアウト・デリバリー対応等
消費（事業）単位の個別化、家族化
多人数一体型消費(事業)の忌避（解体）
- ・コロナ禍の問題について
前述の【ステージC】においても社会・経済が機能するという「認識（誤解）」の瀰漫
⇒ 文化事業とその予算に対しても同様に波及、文化振興への理解の欠落
- ・コロナ禍で問い直す公立文化施設とは
まず公立文化施設の評価項目をリセットする必要がある。
ライブ配信や設定座席の制限は公共性が失われることになり、観賞におけるコミュニティに属している感覚が確認できなくなりコミュニティを崩すことになる。リアルの重要性が文化における存在価値である。

A「公共性」の意味

- ① 国家や自治体に関係する公式のもの ←公立
- ② 特定の誰かにではなく、すべての人々に関係する共通のもの ←公益
- ③ 誰に対しても開かれている
⇒ 公立とは「公共性の」のうち①を軸にみたもの

B「文化」の意味

ここでは文化と芸術を含意しているが本来は別物。

⇒ 公共性の存在意義として、文化の本質を常に担保し保証する役割があり、催し等によってその特性を発揮する責務がある。



講義Ⅰ 美山 良夫 氏



講義Ⅱ 松浦 茂之 氏

講義Ⅱ 『地域劇場の役割 ～三重県文化会館の取り組み事例から～』

講 師 松浦 茂之 氏

(公益財団法人三重県文化振興財団 三重県文化会館 副館長兼事業課長)

(1) 公共劇場を取り巻く現状と課題

ア 公共劇場の業界変遷 ⇒ 施設管理者からプロ集団による経営の時代へと変遷

イ 指定管理者制度とその功罪 ⇒ 「理念は高く、運営実態は低く」が現実

ウ 「劇場・音楽堂の活性化に関する法律」

- ・全国の公共劇場の自主事業の状況としては、約 2,198 館あるうちのおよそ 1 割程度が、劇場法をもとに運営している。⇒ 法整備に実態が追い付かないのが現状

工 業界の課題

- ・組織・雇用面 ⇒ 専門人材の不足、未配置等
- ・会計ルール面 ⇒ 指定管理者は経営努力→内部留保→再投資の環境が整っているか
- ・サービス面 ⇒ 行政財産目的外使用の弊害
- ・意識・マインド面 ⇒ 自主事業を長期戦略で推進していく意識に欠ける

オ 最新の業界動向

- ・芸術至上主義と社会包摂重視主義
⇒ 「どちらか」ではなく「どちらも」
サイレント・マジョリティの重要性
- ・コロナ禍による業界のダメージ
⇒ 来場者・集客数評価の価値転換？
オンライン・映像配信・V R (Virtual Reality) のニーズ

(2) 三重県文化会館の取り組み

ア 三重県文化会館の概要

イ 組織・雇用面での改革

- ・組織のやる気を高める ⇒ 内部登用制度、人事査定、定数自由度、変則勤務
- ・研修や福利厚生でもモチベーションアップを ⇒ 研修制度、職員表彰制度等
- ・組織の専門性を高める ⇒ 専門人材中途採用の活性化

ウ 会計ルールの改革

- ・会計ルールの自由度を高める ⇒ 財源は債務負担行為による複数年財源確保が必須
- ・指定管理は悪しき慣習の見直しを ⇒ 期末剰余金精算および単年度予算折衝の廃止

エ コストダウンと収益向上への取り組み

- ・3大経費のコストダウン（外注委託費・光熱水費・人件費）
⇒ コストダウンと事業やサービスの向上が反比例することが理想
- ・劇場で自己収入を創出する

オ サービス面の改革

- ・貸館事業→許可行為から社会サービスへの転換を
- ・顧客志向・ワンストップサービスの導入
- ・劇場付随サービスの向上

カ 自主事業の取り組み

- ・事業ブランド化 → 劇場のブランド化へ
- ・先進事例の独自アレンジ
- ・ファンドレイズ ⇒ 公的助成の積極的活用、企業協賛の獲得、事業収支判断
- ・職員の専門化を図るには ⇒ 情報収集と鑑賞の積み重ね
- ・for ART と by ART の捉え方 ⇒ アートの持つ力で異分野へ効用を発揮

事例紹介・施設見学 『「地域創造発信型アートマネジメント「鳥取からの発信 ～地域劇場の現場から～」』

講師 中島 諒人 氏（NPO 法人鳥の劇場 芸術監督）

（1）鳥の劇場の概要・沿革について

（2）事例紹介

ア 2019年度 年間プログラム

（ア）創るプログラム

- ・大人も楽しめる子どものためのミニ鳥の演劇祭
⇒ 上演作品5本・ワークショップ2本・体験5本
- ・「剣を鍛える」
- ・プレヒト版「アンティゴネ」※新作

（イ）いっしょにやるプログラム

- ・戯曲の講座 名作を通じて「今」と出会う
- ・子どものための「小鳥の学校」

（ウ）試みるプログラム

- ・高校演劇もっと盛り上げ事業「つくる高校生」 ⇒ 韓国との国際交流事業
- ・劇場で働く人たちを知る
- ・余越保子滞在制作・ダンスワークショップ
- (工) 若手演劇人の成長サポート
 - ・若手演劇人の作品向上、社会との関係づくり支援事業
- イ BeSeTo 演劇祭 26 + 鳥の演劇祭 12
 - 日本 13、中国 3、韓国 4、日中韓共同 1、フランス/イスラエル 1、フィンランド 1 ⇒ 合計 23 作品を 4 週末で上演
- ウ じゆう劇場
 - 障害の有無に関わらず共に作品を創り上げる
- エ トリジユク
 - 学校授業と連携し「演劇を使ったワークショップメニュー」を実施
 - ⇒ 鹿野学園（小中一貫校）・青谷高校を対象に 63 日（109 コマ）、1,701 人が参加
- オ 鳥の劇場以外での上演
- カ アウトリーチ活動
 - ・教育・福祉現場等での講座・ワークショップ・読み聞かせ
 - ・専門性のアウトリーチ
 - ・小作品の上演
- (3) 劇場の運営（収支面）について
- (4) 施設見学



事例紹介



施設見学

3 研修を終えて

(1) 事業評価

参加者からは、「様々な視点から考えることができた。」「具体的な内容で、持ち帰ってすぐに使える内容が多かった。」といった感想が得られ、コロナ禍における公立文化施設の役割や責務、それを形にする具体的な手法や手段を学ぶ機会となったことが窺える。

(2) 当研修会の意義

今回の研修成果として、各館における課題や目標が明確となり、それぞれの日常業務や館の運営に生かすことで、地域住民に対して今より更に良い事業や催物の提供、サービスの提供につながる。当研修会が地域に密着した内容として全国各地で開催されることはとても意義のあるものとする。

(3) 今後の課題について

コロナ禍での開催ではあったが、感染予防・拡散防止対策を徹底し、安心して参加できる研修会を目指した。しかし、情報交換会を中止したことや、感染を避けるための個々の意識もあり、名刺交換などの機会がもてず、交流という部分においては課題が残った。普段顔を合わせる機会の少ない施設間の交流として、対策を講じた場所と時間を提供することも、地域別研修会には必要とする。

また、リモートでの講義も増えてきているとはいえ、本来であればグループワークなどで参加者同士が対面し、試行錯誤したうえで問題を考えるような内容のものを提供できることが望ましいため、これまでの形式や手法にとらわれず、コロナ禍における新しい形の研修会を、今後も模索していくことが必要とする。

地域別劇場・音楽堂等職員舞台技術研修会（関東甲信越静地域）

実施要項	
事業名	令和2年度文化庁委託事業地域別劇場・音楽堂等職員舞台技術研修会 （関東甲信越静地域）
趣旨	劇場・音楽堂の舞台技術等を管理、運営している職員を対象とし、舞台技術に関する専門的な研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
開催期間	収録：令和3年2月3日（水） 配信：令和3年2月27日（土）～3月12日（金）
撮影場所	札幌文化芸術劇場 hitaru 所在地 〒060-0001 北海道札幌市中央区北1条西1丁目
問合せ先 （事務局担当施設）	群馬県民会館（ベイシア文化ホール） 電話 027-232-1111
参加人数	335名（参加施設 89施設）

研修日程・内容	
内容	講師等
舞台・照明・音響業務の安全対策と 札幌文化芸術劇場の劇場運営について （約1時間30分）	(公財)札幌市芸術文化財団 市民交流プラザ事業部 札幌文化芸術劇場 舞台技術部長 伊藤 久幸 氏
	(公財)びわ湖芸術文化財団 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 舞台技術部 部長代理 押谷 征仁 氏
	(公財)埼玉県芸術文化振興財団 彩の国さいたま芸術劇場 劇場部 部長 岩品 武顕 氏

研修会記録

1 はじめに

舞台演出の高度化や機材設備の発達などを背景に、劇場現場で必要とされる安全対策と安全管理能力には大変多様なものが求められている。これらの知識と実践能力を習得した職員を育成するためには、安全知識教育の充実を図るとともに、安全管理に対する意識を高めるための舞台技術職員研修の実施が求められている。

そこで、舞台・音響・照明機材の安全対策に関する基礎知識や最新機器の導入事例とその操作における安全管理方法等の実践的能力を習得するため、多くの現場実績を積んだ各分野の舞台技術者を講師にお迎えし、2018年に開館した最新鋭の劇場である札幌文化芸術劇場 hitaru において令和2年度文化庁委託事業「地域別劇場・音楽堂等職員舞台技術研修会（関東甲信越静地域）」を開催した。

また、当研修会は新型コロナウイルス感染症対策として初のオンライン実施（Youtube を用いた録画配信）とした。

2 研修内容

講義1 『舞台・照明・音響業務の安全対策と札幌文化芸術劇場の劇場運営について』

講師 伊藤 久幸 氏（公益財団法人札幌市芸術文化財団 市民交流プラザ事業部

札幌文化芸術劇場 舞台技術部長）

押谷 征仁 氏（公益財団法人びわ湖芸術文化財団

滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 舞台技術部 部長代理）

岩品 武顕 氏（公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団

彩の国さいたま芸術劇場 劇場部 部長）

音響業務に関する講義では、滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール舞台技術部部長代理の押谷征仁氏から、フライングスピーカーのつり込み作業における安全対策と客席に音響調整卓を設置する際の留意事項等について講義していただいた。また札幌文化芸術劇場の設備であるケーブルピットを活用したケーブルの安全な敷設などについてご紹介いただいた。

照明業務に関する講義では、彩の国さいたま芸術劇場 劇場部部長の岩品武顕氏から、灯体やカラーフィルターの落下防止対策、高所作業時の安全対策、美術バトンに照明を仮設する際の安全対策等について解説いただいた。また札幌文化芸術劇場の設備であるバルコニーやライティングブリッジにおける安全対策についてご紹介いただいた。

舞台業務に関する講義では、札幌文化芸術劇場舞台技術部長の伊藤久幸氏から、オーケストラピット昇降時の安全対策やビスを用いた舞台装置設置の安全対策、バトン操作時の安全管理方法等について解説いただいた。また、札幌文化芸術劇場の舞台色やすのこの塗装色による安全への配慮等についてご紹介いただいた。

札幌文化芸術劇場の劇場運営については、朝礼の実施方法や業務分担によるヘルメットの色

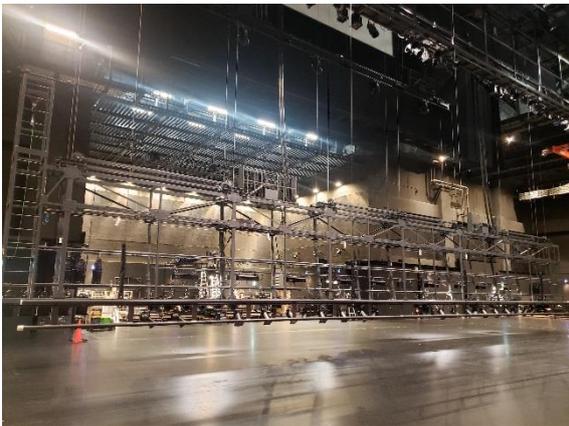
分け、搬入の手順や客席内における三脚設置のルールなど日常の劇場運営における様々な場面での安全対策についてご紹介いただいた。



研修会場外観



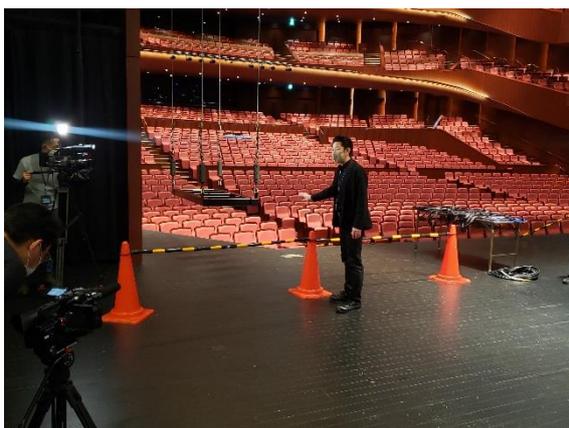
研修会場客席



研修会場舞台



開講式・講師紹介



音響講義



照明講義



舞台講義



劇場運営紹介

3 研修を終えて

① 事業評価

アンケート結果によると、研修全体の満足度については「満足」「やや満足」が 92.6%、役立ち度については、「参考になる」「やや参考になる」で 100%となっており、実用的な題材であったと推察される。また、理解度についても「理解できた」「やや理解できた」で 100%となっており、多くの参加者にとって適切な難易度設定であったと考えられる。総じて、事業評価としては評価できる内容の研修会であったといえる。

② 当研修会の意義

当研修会の意義は、関東甲信越静支部内の各劇場内の職員が地域の枠を越え集合し、統一的な知識と技術の習得及び率直な意見交換がなされることで、この研修会で得たものを少しでも各地域に持ち帰ってその業務に活用し、利用者へのサービス提供に役立てることにある。

しかし、今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響によって、従来の集合研修形式での実施が見送られることとなり、録画配信での実施となった。録画配信実施の利点を検討した結果、会場設定について支部の枠を越えた最新鋭の劇場を選定することとなった。そこで 2018 年に開館した札幌文化芸術劇場 hitaru を研修会場として設定した。また講師についても、数多くの現場実績を積んだ各分野の技術者を地域の枠を越えて全国より招聘した。

その結果、舞台・音響・照明業務の安全対策について全国画一的な見解を得ることができた。また、最新鋭の機材や設備に対する安全管理についても多様な知識を得ることができ、大変有意義な研修会であった。

アンケート結果でも内容については、「大変よい」「よい」「おおむね良い」が 98%となっており参加者にとって適切な内容を提供できたと考えられる。また今回初の取り組みとなった「オンライン環境」についても各評価項目において「大変よい」「よい」「おおむね良い」が 98%を達成することができた。

「研修設計」等他の項目でもよい評価をいただいております、参加者にとって意義深い研修会を提供できたと推察する。

③今後の課題について

アンケートの自由記述欄を見ると、研修会場について「研修会場と勤務先の設備が違いすぎて、参考にならない」という意見と、「自分の施設にはない設備、装置などが見られて良かった」「施設により舞台機構に違いがある事が分かり、勉強となった」という両極端な感想が見られた。

また、当研修会は舞台技術職員を主な対象として研修内容を設定していたが、受講者の職種を見ると「管理運営」や「事業企画」の参加者が30.2%を占めていた。

よって、今後の課題としては講義内容や研修会場の詳細を事前に明示したり、対象受講者の職種や担当業務を明確にした募集を行ったりするなど検討し、より一層充実した研修会の実施を目指したい。

またオンライン開催の課題として、カメラワークや画質などについての要望が自由記述欄に見られたので、それらの点についても今後改善していきたい。

地域別劇場・音楽堂等職員舞台技術研修会（中四国地域）

実施要項	
事業名	令和2年度文化庁委託事業地域別劇場・音楽堂等職員舞台技術研修会（中四国地域）
趣旨	劇場・音楽堂等の舞台技術研修会を管理、運営している職員を対象とし、舞台技術研修会に関する専門的な研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
開催期間	令和3年1月14日（木）～1月15日（金）
会場	岡山市民会館 所在地 〒700-0823 岡山県岡山市北区丸の内 2-1-1 電話 086-223-2165
問合せ先 (事務局担当施設)	岡山市民会館 電話 086-223-2165
参加人数	55名（参加施設 29施設）

研修日程・内容			
日時	内容	講師等	
1/14 (木)	12:30～13:30	受付	
	13:30～13:40	開講式	
	13:40～15:00	基調講演 『岡山芸術創造劇場が目指す劇場計画』	岡山芸術創造劇場 スーパーバイザー 草加 叔也 氏
	15:00～15:40	ブース見学	
	15:40～17:00	講義Ⅰ 『岡山芸術創造劇場の舞台音響設備概要』	ヤマハサウンドシステム(株) 坂下 仁 氏 兼子 紳一郎 氏
1/15 (金)	9:00～9:30	受付	
	9:30～10:30	講義Ⅱ 『岡山芸術創造劇場の舞台機構設備概要』	三精テクノロジーズ(株) 砂子澤 嘉彦 氏
	10:30～11:00	ブース見学	
	11:00～12:00	講義Ⅲ 『岡山芸術創造劇場の舞台照明概要』	(株) 松村電機製作所 中津川 啓 氏
	12:00～12:10	閉講式	

研修会記録

1 はじめに

舞台技術に関する専門的な研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資することを目的としている。また、2023年に新しくできる岡山芸術創造劇場の舞台設備について講師をお招きし舞台設備概要について学ぶ。

2 研修内容

基調講演 『岡山芸術創造劇場が目指す劇場計画』

講師 草加 叔也 氏

(岡山芸術創造劇場スーパーバイザー 有限会社空間創造研究所代表取締役)

岡山芸術創造劇場は「岡山に暮らす人々が地域への愛着をもちながら、いきいきと暮らせる豊かな文化都市を目指す」とする岡山市文化芸術振興ビジョンを具現化する大きなプロジェクトである。スーパーバイザーである氏に同劇場のコンセプトについて講義をして頂いたことで、参加された多くの方に関心を持って頂けたと確信する。

講義Ⅰ 『岡山芸術創造劇場の舞台音響設備概要』

講師 坂下 仁 氏 (ヤマハサウンドシステム株式会社)

兼子 紳一郎 氏 (ヤマハサウンドシステム株式会社)

岡山芸術創造劇場に導入予定の舞台音響設備について講義を頂いた。講義は音響システムを理論的に説明頂くだけでなく、導入予定の音響機器を持ち込んでいただき、実際に視聴することができ、大変興味深い内容であった。

講義Ⅱ 『岡山芸術創造劇場の舞台機構設備概要』

講師 砂子澤 嘉彦 氏 (三精テクノロジーズ株式会社)

同様に岡山芸術創造劇場に導入予定の舞台機構設備について講義を頂いた。氏は東京宝塚劇場、歌舞伎座等の設計も担当されており、今回導入予定の舞台機構設備の講義も興味深く伺うことができた。

講義Ⅲ 『岡山芸術創造劇場の舞台照明設備概要』

講師 中津川 啓 氏（株式会社松村電機製作所）

同様に岡山芸術創造劇場に導入予定の舞台照明設備について講義を頂いた。氏は様々な新築ホール、改修工事の設計に携わっておられる。今回導入予定の舞台照明設備については、講義のみでなく実際に目の当たりにすることができ、大変興味深いものであった。

3 研修を終えて

① 事業評価

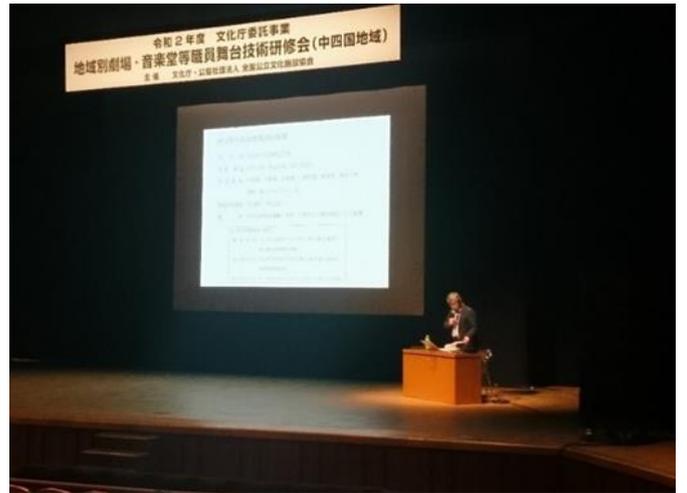
地方劇場が芸術創造を謳い製作主体として作品創造に関わる場合、これまでの貸館事業の舞台管理スタッフ業務とは別に舞台美術・照明・音響・衣装等をまとめテクニカル部門の制作進行していくスタッフ育成が必要であると感じられた。

② 当研修会の意義

2023年に開館される岡山芸術創造劇場について詳細を告知、関係者ら参加者に普及することができた。今後は、岡山芸術創造劇場について市民・関係者らに発信していこうと思う。

③ 今後の課題について

今回の基調講演草加先生の講演が好評であり、今後もテーマに沿った充実した内容を提供できるように試案し、舞台技術研修会の知名度を上げより多くの参加者を募りたい。今回の反省点を次回の舞台技術研修会に活かしてより良い研修会になるよう心掛けていきたいと思う。



地域別劇場・音楽堂等職員舞台技術研修会（九州地域）

実施要項	
事業名	令和2年度文化庁委託事業 地域別劇場・音楽堂等職員研修会（九州地域）
趣旨	劇場・音楽堂の舞台技術等を管理、運営している職員を対象とし、舞台技術に関する専門的な研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
開催期間	令和2年12月15日（火）
会場	アルカス SASEBO（イベントホール） 所在地 〒857-0863 長崎県佐世保市三浦町 2-3 電話 0956-42-1111
問合せ先 （事務局担当施設）	長崎ブリックホール 電話 095-842-2002
参加人数	76名（参加施設 28施設）

研修日程・内容			
日時	内容	講師等	
12/15 （火）	13:00～13:30	受付	
	13:30～13:40	開講式	
	13:40～15:10	セミナー（1）-1 『電気の危険体験』	九州電力(株)長崎支店営業部 技術提案グループ 副長 木下 晃一 氏 小野 秀明 氏 片淵 達郎 氏
	15:10～15:25	休憩	
	15:25～16:55	セミナー（1）-2 『一般作業の危険体験』 質疑応答	
	16:55～17:05	閉講式	

研修会記録

1 はじめに

「電気」は人間が暮らしていく上で欠かすことができず、日常生活は全て「電気」に依存している。会館・ホールの施設を動かしているのも「電気」の力である。日常的に接している「電気」だが、「電気」の基礎的な知識を理解してもらうとともに、感電事故などを疑似体験しながら、電化製品の正しい使い方や注意点を学び、「電気」についての理解を深めてもらうことを目的とした。

また、舞台関係の作業など一般的な作業の中に潜む危険について、疑似体験しながら具体的に理解してもらい、安全で正しい作業方法を習得してもらうことも目的に研修会を実施した。

2 研修内容

セミナー（1）-1 『電気の危険体験』

講師 木下 晃一 氏（九州電力株式会社 長崎支店営業部 技術提案グループ副長）
小野 秀明 氏（九州電力株式会社 長崎支店営業部 技術提案グループ副長）
片瀨 達郎 氏（九州電力株式会社 長崎支店営業部 技術提案グループ副長）

近年の電気火災・感電死傷事故の発生件数は、約 85 件と横ばい傾向が続いている。まず基礎的な電気用語と家庭（事務所）における電気の流れの解説。分電盤とコンセントの容量を理解し、電気機器の消費電力の目安を把握するとともに、電気の正しい使い方の説明を受けた。また、電気の代表的な 2 つの事故、漏電と電気ショート（トラッキング現象）の説明と、事故を未然に防ぐ対策の説明を受けた。

参加者全員が低圧の感電体験をした他、トラッキング現象の体感、たこ足配線の発熱など、器具を用いて具体的な解説が行われた。

ブレーカーの容量確認と接続機器の把握、漏電対策・電気ショート対策など、家庭（事務所）における電気事故防止対策を、具体的な実験、疑似体験をもとに説明がなされた。



感電体験の道具



参加者全員が感電体験

セミナー（1）-2 『一般作業の危険体験』

講師 木下 晃一 氏（九州電力株式会社 長崎支店営業部 技術提案グループ副長）
小野 秀明 氏（九州電力株式会社 長崎支店営業部 技術提案グループ副長）
片瀨 達郎 氏（九州電力株式会社 長崎支店営業部 技術提案グループ副長）

今回の研修会には、会館・ホールの勤務経験年数 5 年未満のスタッフが約半数参加した。また、舞台技術、照明業務、施設管理などの業務を担当している人が多数参加したが、普段の作業の中に潜んでいる危険を十分認識させられる内容だった。セミナー2では、器具を使用して実際に体験しながら、危険性を確認し、どう対処して安全を確保すればいいのかを認識してもらう説明がなされた。

作業用安全帯の宙吊り体験、脚立を使用する際の安全な使用方法、ヘルメットの衝撃体験など、舞台関係のスタッフが日ごろ作業する際に注意すべき点が具体的に指摘された。危険度を認識し、正しい作業方法を理解して作業にあたる点を再認識する内容だった。



脚立の危険体験



ヘルメットの衝撃体験



安全帯宙吊り体感



落下物衝撃実験

3 研修を終えて

新型コロナウイルス感染拡大の第3波が全国的な拡がりを見せる中、研修会の実施を慎重に検討し、マスク着用・消毒・検温・距離を保つなど、感染防止対策を実施しての研修会となった。



コロナ感染防止対策の案内



会場の様子

電気は生活に欠かせないもので、「アンペア」や「ワット」などの単語は聞いた事があっても、その意味や容量、また電気もたらしてくれる便利さの裏に潜む危険性は意外に認識されていない。

今回の研修会は器具を使用して疑似体感や実験を取り入れ、より具体的な解説をしてもらい、参加者のアンケートでも「疑似体験や実験を取り入れた内容は大変判り易かった」「危険の疑似体験は新鮮で、かつ良い体験だった」などの感想が多かった。同時に、電気に関する基礎知識を習得し、電気に関する事故防止について職場や家庭でも防止対策の必要性を認識した参加者が多かったようだ。

また、脚立の安全な使用法やヘルメットの衝撃度実験などについて、舞台関連の業務を担当している参加者からは、「普段の作業の中での危険性を再認識した。今後、安全を意識して作業に努めたい」という感想も寄せられた。

今回の研修内容の「電気」に関する事や、「一般作業の中での危険に対する注意点」については、各施設のホームページや広報誌などで一般市民にPRする方法も有意義かと思う。